

光崎検校の手事物：掛け合いにみる三弦と箏の関係
福田千絵

本稿は、光崎検校の手事物の音楽的特徴を考察しようとしたものである。光崎は、幕末の京都で活動した盲人音楽家で、箏曲の改革者として知られる。光崎は、三弦と箏を両方ひとりで作るという方法で手事物を作った。これは、光崎が始めたとされる新しい方法であり、従来は、先に作られた三弦に対して別の人物が箏を付けるという方法であった。箏曲の改革者とされる光崎の資質にかんがみれば、方法の違いに起因して三弦と箏の関係に相違が生じていることが予想できる。

そこで、本稿では、新しい方法によって作られた B 群《千代の鶯》《夜々の星》《桜川》における三弦と箏の関係を、光崎が作った三弦に対して、彼の師であり、京風手事物を大成した八重崎検校が箏を付けた A 群《七小町》《三津山》と比較した。時間的に A 群は B 群に先立って作られたものである。分析は、掛け合いを中心に詳細に行った。

本稿での分析と考察の結果、新しい方法による曲群では、三弦と箏の関係は多様化しており、三弦と箏が八重崎のものよりもいっそう対等になっていることが明らかになった。つまり、光崎は新しい曲作りの方法にともなって、あらたな三弦と箏の関係を生み出したといえるだろう。